

学会名 日本物理療法合同学会大会2024
2024年1月26日～27日

研究テーマ 経皮的電気刺激により神経障害性疼痛が軽減し
積極的なリハビリテーションの再開に至った脊髄損傷例:症例報告

病院名 医療法人社団健育会 ねりま健育会病院

演者 ○戸丸晴瑛(理学療法士)
間藤大輔(理学療法士)

概要

【はじめに】神経障害性疼痛は脊髄損傷後の合併症の一つで、機能障害や参加、QOLにも悪影響を及ぼすとされている。脊髄損傷後の神経障害性疼痛に対しては経皮的電気刺激が推奨されているが、その効果量は大きいという報告は少ない。今回、脊髄損傷後の下肢の神経障害性疼痛に対して経皮的電気刺激を行うことで、大幅な疼痛の改善と積極的なリハビリテーションの再開に至った症例を経験したため報告する。

【主な症状・臨床所見】本症例は60歳代の男性症例。X日に下肢痛と脱力感の訴えがあり、急性期病院へ救急搬送された。X+1日にL2/3椎間板ヘルニアに対して内視鏡下椎間板摘出術を実施。術後も下肢の麻痺が残存し、X+57日に当院回復期病棟へ入院となった。入院当初からアロディニアを認めていたが離床を進める中で減少していった。X+92日、立位や歩行訓練の中で左膝窩部にNRS5, SF-MPQ-2 40点の神経障害性疼痛(つっぱる痛み、絞めつける痛み)を認め、疼痛が出現してからは立位や歩行訓練に対して消極的となった。

【治療的介入】本症例のリハビリテーションの阻害因子である神経障害性疼痛を軽減するために経皮的電気刺激の使用を開始した。経皮的電気刺激にはイト-ESPURGE、伊藤超短波株式会社を用いた。電極は左膝窩の疼痛部位を挟むように設置し、パラメータは周波数100Hz、パルス幅200 μ sec、強度40～45mAの設定で行った。刺激時間は1日20分で5日間行い、電気刺激を行いながら起立着座や歩行などの運動療法を行った。約1週間後のX+101日にNRS, SF-MPQ-2を再評価した。

【結果】X+92日の介入直後の即時効果はNRS5の神経障害性疼痛は0となった。1週間後のX+101日ではNRS4と疼痛の軽減は少なかったが、SF-MPQ-2のスコアは9点と大幅な改善を認めた。また、疼痛の軽減に伴い電気治療を併用しなくても立位や歩行訓練を再開することができ、訓練に対する消極的な発言も少なくなった。